



● 生かされている、これからは

浪速金液株式会社

代表取締役 林 雅史

明けまして頑張ろう、希望に満ちて。今年はこの言葉が相応しい挨拶と思います。昨年は、東日本大震災、台風、円高とわが国における最悪の年でした。しかしながら、東日本大震災での日本人の行為が貴なるもの、秀なるものとして世界に行き渡りました。例えば、被災者たちは行列を作り順番に支援物資なり食事なりを受け取りました。その時は“ありがとう”と言ったり、手を合わせました。千年に一度といわれる大災難に会っても騒がず、暴れず、壊さなかったのは誰かが見ているかいないかではありません。平穏の日と同じように日本人は災害の日も秩序を守りました。日本人が何気なくしている仕草が世界に届いていくのです。ノーベル賞のことならほとんどの日本人は知ってます。しかし、スペイン王室に「アストゥリアス皇太子賞」があることを知っている人は少ないと思います。昨年は同賞の平和部門で、「フクシマの英雄たち」が授与されました。「逆境の中での勇気、責任、使命を世界に示した」として福島原発事故の処理に献身した自衛隊、消防、警察から五人が選ばれました。この事は日本社会に深く根付いている行動力です。今こそ日本人、一人一人が誇りを持つべきであります。残念ながらあきらかに新政権のパワー不足によりプレゼンスは世界から後退しつつあります。しかし、現在の段階では世界中から“がんばろう日本”が注目を浴びています。そこで未曾有の国家再生の好機と捉え何をしなくてはならないがではなく、このタイミングを逃がさないためにもこの世に生きているのではなく、生かされている思いで企業を通じて目の前の仕事や社会との繋がりを精一杯強めていくべきだと思います。

扱て「CASH COW」という英語があります。文字通りキャッシュ（金銭）、カウ（牛）のことで、牛一頭があれば日々の乳牛をうみだしてくれて生活を守る存在となります。その存在があれば安定したお金を稼げることを喩えて言います。これまでの経済はこの「CASH COW」作りに追われてきました。お金を生み出す何かを探し求めて金銭本位の資本主義が幅を利かせてき

ました。しかしその一方で道徳、倫理における価値観を狂わせてこなかったでしょうか。

二十世紀は成長と力と拡大の時代、二十一世紀は心と感性と存在感の時代として推移しています。その推移の中でこれからの企業経営は、法政大学院政策創造研究科 坂本教授の唱える「五人に対する使命と責任を果たすための活動」だと思います。五人とは、ステークホルダー（利害関係者）のことです。利害関係は大勢いますが中堅、中小企業の経営者は五人の利害関係を意識すれば十分だと述べています。使命と責任とは、「幸せを実現する、幸せを追求する」と言うことです。かつて私達は“CASH COW”作りが企業の使命、責任であると考えて来ました。これからは、中堅、中小企業として残る為には五人の幸せを実現する事です。ここで言う五人のステークホルダーとは、(1) 社員とその家族、(2) 外注先、(3) 顧客、(4) 地域社会、(5) 株主の五人です。これまでは社員とその家族が五番目でした。最近でも多くの企業は社員とその家族は三番目に位置づけられています。特にこれからは顧客、株主より社員とその家族、外注先が一番大切にしなればいけません。即ち (1) から (5) の順番で幸せを追求することです。「社員とその家族」に第一主義経営を貫いて、しかもそのことが全社員の心の奥底まで浸透している企業にする事です。

好況を作るのも社員、不況を作るのも社員です。好不況は社員もモチベーションのレベルを表すものだと思います。好況になる為には、提案力、技術力、改善力、開発力のある少人数メーカーになるべきです。又、外注先が自分の事のように考えてくれるようにする事です。これからの企業は愛情（ぬくもり）が感じられる企業です。宇宙の中で生かされている我々は、企業を通じて“がんばろう日本”に貢献出来るよう一丸となって努力する事です。

最後に、(財)名古屋産業振興公社の皆様と異業種交流の皆様との関係を益々深め幸せを実現し“がんばろう日本”に貢献する企業になる事です。